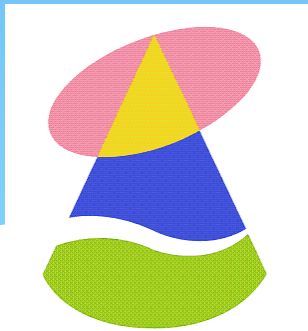


# 和木町の取り組み



和木町保健相談センター  
遠田千春

# 目次

- はじめに
- 和木町保健相談センターの現状
- 町の保健師の強みを活かした活動事例
- 関係機関との顔の見える関係性による

## ネットワークと支援

- 母子保健の「いま」と「これから」
- おわりに

# はじめに

## 和木町とは

- 緑の風薫る文化のまち ～今年、町制施行50周年～
- 山口県東部、広島県との県境、瀬戸内海沿岸に位置
- 人口 約6,000人、面積 10.58km<sup>2</sup>
- 年間出生数 65人程度  
→新型コロナウイルス感染症の流行以降、減少している。
- 教育施設 町立こども園1園、町立小学校・中学校各1校
- 気候が穏やか、生活の利便性が高い。
- 婚姻や出産による転入、入園や入学による転出が多い。  
→定住期間が短い。



# 保健相談センターの現状①

## 母子保健の展開から

- 平成30年4月～要保護児童対策地域協議会（以下、要対協）の調整機関
    - ・ 平成19年度以降～本庁保健福祉課事務職担当
    - ・ ケース理解やアセスメント、  
援助方針・役割分担等の決定が困難
    - ・ 平成28年～児童福祉法の改正
  - 令和元年6月～子育て支援包括支援センター
  - 令和4年1月～こども家庭総合支援拠点
- 今後は、こども家庭センターとして総合的な相談支援機関の機能をどのように展開するのかが重要になる。

# 保健相談センターの現状②

## 保健師の業務体制

- 常勤の正規職員 6人

内訳：本庁保健福祉課 介護保険担当 1人（管理職）

同課 出先機関である保健相談センター保健衛生担当 5人  
（管理職 1人、実務 4人うち 1人育児休暇取得中）

## 保健相談センター実務保健師の役割

- ポピュレーションアプローチを主軸にした
  - ・ 母子保健の展開と子育て世代包括支援センターの運営
- ハイリスクアプローチを主軸にした
  - ・ 発達支援、要対協の調整機関、子ども家庭総合支援拠点
- その他、住民の健康増進や感染症対策、予防接種等の業務

# 保健相談センターの現状③

## 和木町保健相談センターの現状

低

妊娠期(胎児期)



出生・新生児期  
(産褥期)



乳幼児期

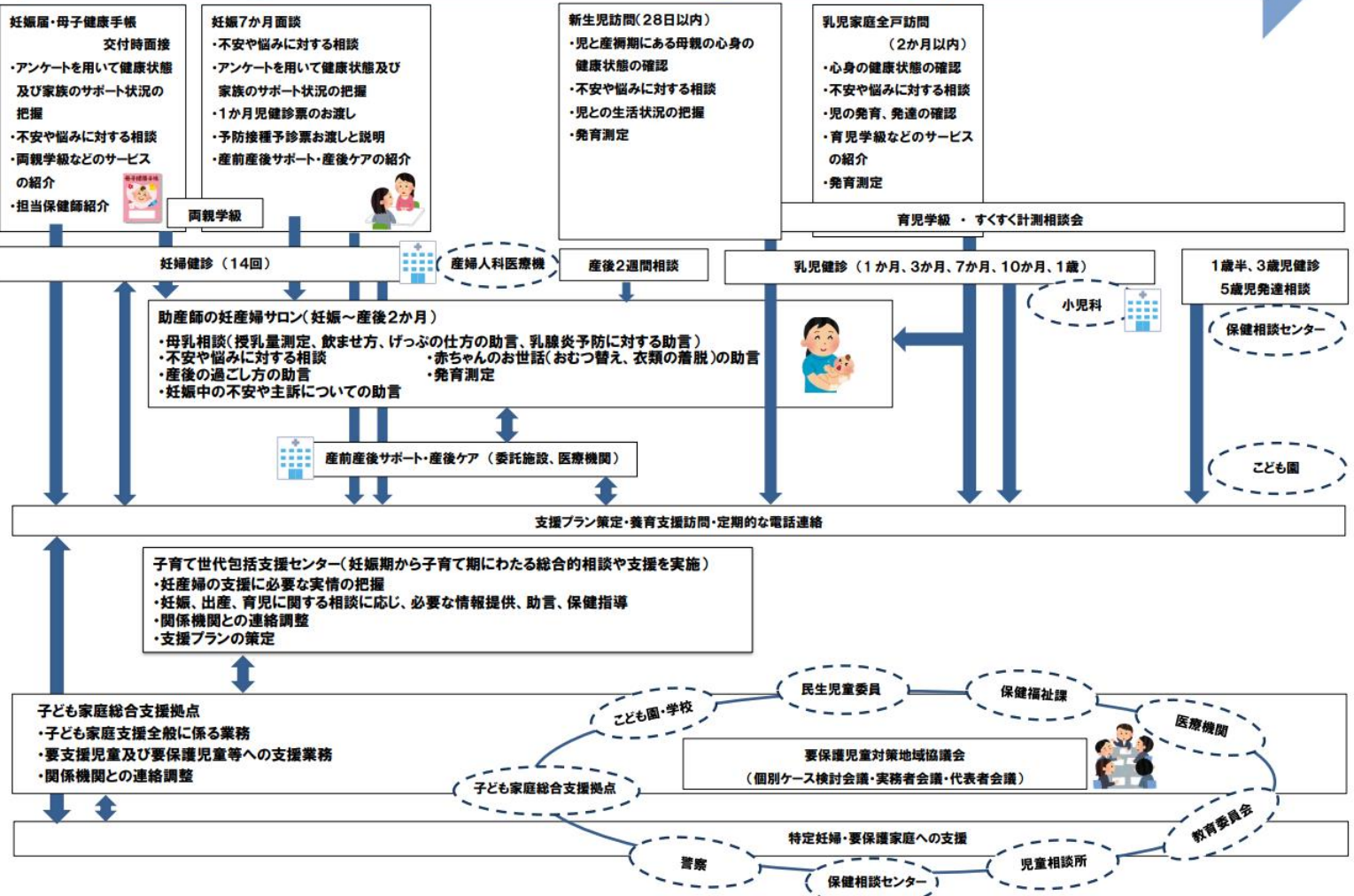


幼児期



リスクの高さ

高



# 保健相談センターの現状④

## 保健相談センターでの一体的な取り組み

- 情報共有や役割分担がスムーズ
  - ・ 住民の健康状態や生活の様子等をリアルタイムで把握
  - ・ アセスメントや援助方針の修正、関係機関との調整に直結
- 家庭や地域全体を予防的観点で包括的・継続的に支援
- 窓口が一本化
  - ・ 関係機関からの一報や情報連携がスムーズ

## 課題

- 支援機関と調整機関を兼任。役割を混同していないか。  
→ 「支援機関としての保健師活動」と「調整機関としての俯瞰的視点による管理」を繰り返しモニタリングとアセスメント。

# 町の保健師の強みを 活かした活動事例①

## 根幹の修得

- 母子保健計画に基づいた保健事業の展開に奔走
- 住民の顔を覚え、関係性を築く技術を身につけ、家庭や地域の特性を把握

## 保健師の分散配置

- 教育委員会部局に異動し、学校保健や幼児教育に触れる。
- 住民に寄り添う角度と見方が変わる。
- 直接的なサービスとは何かを考えさせられる。

→教育委員会や学校・保育教諭等の学校関係者の視点や思いを知る。



# 町の保健師の強みを 活かした活動事例②

## Aくんとの出会いと状況

### ● 就園前からの関わり

- ・ Aくんだけでなく、その保護者にも発達特性がある。
- ・ 父親～注意欠如・多動症（ADHD）
- ・ 母親～コミュニケーション能力が低い。

### 知的レベルはボーダーライン

- ・ 親族からのサポートや相談できる人がいない孤立した状態
- ・ 「分からない」や「困った」等のSOSの発信が苦手
- ・ おとなしいが故に困り感に気付かれにくい

→発達支援が理解できず、早期介入と早期療育につながっていない。

# 町の保健師の強みを 活かした活動事例③

## 幼稚園生活への支援

### ● 入園準備

- ・ 就園前からの情報のアセスメント
- ・ 幼稚園での生活がソーシャルスキルトレーニングになり、見守り体制の強化につながる。

→カンファレンスを行い、職員間で共通認識と役割分担。

### ● 保育教諭と養護教諭の得意分野を活かした支援

- ・ 説明内容をイラスト化したり、現物を見せたりして視覚支援
- ・ 保護者に寄り添い、内容が理解できたか一つ一つ丁寧に確認
- ・ 送迎時に保護者に会える利点を活かして、児の様子を伝える、参観を促す。→保護者が理解しやすい環境を提供する。

# 町の保健師の強みを 活かした活動事例④

## 療育に向けた取り組みと支援

- 保護者の理解と行動変容
  - ・ 関係性の構築
  - ・ 生活環境、生活状況のモニタリング～安心、安全、安定
- 受診の準備
  - ・ 医療機関への事前の情報提供
  - ・ 具体的な支援～予約方法や診察場面の練習

「Aくんの発達支援」は、「保護者の生きづらさの理解」となり、「リスク要因の軽減」につながった。「伴走型の家族支援」であった。「後の発達支援にも活用」<sup>11</sup>されている。

# 関係機関との顔の見える関係性による ネットワークと支援

## 保健相談センターへの理解

- これまでの活動を通じて
  - ・ 関係機関との顔の見える関係性が、現在のネットワーク
  - ・ 保健相談センターの機能や役割、保健師に対する理解や協力
- 緊急時の対応
  - ・ 新型コロナウイルス感染症の流行に伴う緊急事態宣言下の要支援児童への対応
    - 学校関係者による電話連絡や家庭訪問
    - 援助方針と役割分担等の見直し

# 母子保健の 「いま」と「これから」①

## 母子保健の現状

- **新型コロナウイルス感染症の流行以降**
  - ・ 母子健康手帳の交付件数は減少
  - ・ 特定妊婦の増加 背景：婚外妊娠、ステップファミリー、生活困窮、精神疾患の通院・既往歴  
→ ケース理解を深めるため、幼少期からの生育歴や家族背景、生活環境等を把握。
- **ケース管理やサポート体制の強化**
  - ・ チェックシートを活用したアセスメントの実施
  - ・ ケースカンファレンスの定期化  
→ 保健師の共通認識、保健師自らが実践して把握できる具体的な手段の導入。

# 母子保健の 「いま」と「これから」②

## 保健師の強み

- 地域を知っている
- 個々の生活の様子から健康課題を見極めることができる
- 個々の健康課題を地域の健康課題として捉え、課題解決へ導く  
→個から集団、集団から個を見る地区診断、  
看護過程に基づいたPDCAサイクルの展開。

## 今後の展開

- 発達支援：幼児健診後のこども園訪問にて事後フォローを充実
- 5歳児発達相談：教育分野だけでなく、新たに福祉分野と連携  
→住民のQOLの向上、  
自らの力で意思決定<sup>14</sup>ができるような自己決定の促し。

# 母子保健の 「いま」と「これから」③

## 関係機関との連携

- 県内外の他の自治体へのケース移管
  - 他の自治体担当者と情報連携
    - ・ 事実確認や情報整理、見立てを学ぶ貴重な機会
    - ・ 広域連携やより高度な調整機能の必要性
  - 県や児童相談所との平常時からの関係性の構築
    - ・ 専門的で広域的な指導・助言
    - ・ 困難事例への支援の協働
- 更なる体制整備の強化

# おわりに

その人らしい暮らしを支えるために

- 町のことや町に住む人たちのことを知る
- 地域や住民、社会資源である多くの関係機関を知る
- 顔の見える関係性を築く